

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520060

研究課題名（和文） 日本における宋代風水思想の受容と展開に関する研究

研究課題名（英文） A Study of Acceptance and Development Song Dynasty' s Feng-shui Thought in Japan

研究代表者

鈴木 一馨（SUZUKI IKKEI）

財団法人東方研究会・研究員

研究者番号：50280657

研究分野：宗教学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：風水 江西派 中世 日中交流 禅宗 庭園 空間構造

1. 研究計画の概要

研究の全体構想は、日本における風水の受容と定着・展開に関する全体像を把握することであり、これはさらに上位の研究構想である、日本における中国民間思想にもとづく宗教的諸思想・技術の受容と展開に関する研究の一端をなすものである。

本研究の目的は、特に中国において風水思想・技術が一大変容を遂げた9世紀末期から10世紀中期の影響を、日本が人的・交通路としてどのルートで受容し、日本の内部で誰がどのように現象化したのかを明らかにしようとするところにある。

直接の研究内容としては、まず日宋交流の大きな担い手である禅僧と商人による日宋交流の実状を追うことによって、人的・交通路としての受容ルートの解明をはかり、入宋僧・渡来僧の開創した禅宗寺院を中心とした禅宗寺院の伽藍空間の分析、それらの僧の著作や僧伝あるいは寺誌などに見られる風水用語の検出、また商人や禅僧の手を経て流入したと思われる邸宅空間（特に庭園構成）の分析を通して江西派風水の特徴の検出を行ない、中世日本において宋代風水の様式として江西派風水の思想と方法が伝来していたことを明らかにする。

2. 研究の進捗状況

現在のところ、日宋間の禅僧の往来については大方の把握をしており、その開創した寺院についての現地検分と関係する微少地名の調査、寺誌や関連絵図の収集に努めており、特に臨済宗を中心とした主要な寺院について調査が進んでいる。宋代の風水書を繙く限り、その思想が実際の空間に即して形成され

たものと認められることから、現地検分は不可欠なものであり、またそれに伴う微少地名の検出も不可欠なものと言える。

また、寺院伽藍空間の問題については、日本側のみの検分では問題の解決をはかることができないことから、日宋交流の中国側の拠点となった浙江省を中心に、禅宗の展開した地域における禅宗寺院の現地検分も行なっている。これについては、特に道元の修行した天童寺と永平寺との間で伽藍空間や立地の類似性が多分に見られることなどが判った。ただし、微少地名や道元の著作から「永平寺が天童寺の写しである」ということの確認を得るには至っていない。

商人の往来については、まだ全体像を把握するに至っておらず、資料の収集・分析を進めなければならない。ただし、邸宅・庭園空間については、発掘調査報告などにより推定復元された9世紀段階における平安京内の貴族の邸宅の空間構成と、これまで造園史・建築史によって明らかにされてきた寝殿造住宅・寝殿造庭園の空間構成を比較することにより、寝殿造住宅と寝殿造庭園が同時に形成されたのではなく、寝殿造住宅は9世紀に形成された住宅様式であるのに対して、寝殿造庭園は10世紀後期より形成され始めたものであることが判明した。また、これに関連して『作庭記』の記述と宋代の風水書との比較により、少なくとも寝殿造庭園が江西派風水の影響によるものであるとの結論を得るに至っている。これは商人によりもたらされた江西派系の風水書の影響によるものではないかと推定してはいるものの、まだその確認を得るに至っていない。

3. 現在までの達成度

③ やや遅れている。

本研究の達成が遅れている理由は、文字による証明性の不足にある。

中国の資料を繙くと、地誌・寺誌あるいは僧伝などに風水に関する記述・用語などが散見され、風水思想による空間認識が文字化されていることがままあるが、日本の地誌・寺誌・僧伝の類にそれらのものがほとんど見つからない。本研究の一番の難点は、中世に形成された禅宗寺院空間や邸宅空間が江西派風水の空間構成を持っているということの証明を通して、中世日本における宋代風水の思想と方法が伝来していたことを明らかにしようとするところにある。現地検分した多くの禅宗寺院において、検分の限りでは江西派風水の影響を受けているとみられる寺院は多いものの、体感的・観念的である風水空間の構成を確実に証明するための、文字の裏付けがなかなか得られないという点において達成度が遅れている。

4. 今後の研究の推進方策

本研究はすでに最終年度に入っているが、上記の点より所期の目的を十分に達成しているとは言いがたい。ただし、空間認識が体感的・観念的である限り文字による証明はあるに越したことはなく、その検出のためにも13世紀から14世紀において日中間を往来した僧侶あるいはそれらの僧侶が開創した寺院について、僧伝や寺誌などの資料の分析は引続き行なう必要がある。

それと同時に、平成20年度より取りかかっている10世紀から14世紀にかけての造宅・庭園・都市形成について同時代的に記された資料における空間認識に関する調査を行なう予定であり、これは『作庭記』などの例がある如く、あるいは僧伝や寺誌の分析よりも効果が得られるのではないかと考えている。

それと同時に、これまでの研究により得られた、寺院の空間構成パターンについては少なくともデータベース化作業を行ない、今後の研究の資助にできるようにしたいと考えている。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 鈴木一馨、日本古代・中世期の風水術における四神相応について、宗教研究、359、383～384、2009、査読無
- ② 鈴木一馨、日本における江西派風水の受容について、歴史地理学、241、87、2008、査読無

- ③ 鈴木一馨、日本における江西派風水の展開について、宗教研究、355、435～436、2008、査読無
- ④ 鈴木一馨、日本における江西派風水の受容について、宗教研究、351、366～367、2007、査読無

[学会発表] (計5件)

- ① 鈴木一馨、日本古代・中世期の風水術における四神相応について、日本宗教学会第67回学術大会、2008年9月14日、筑波大学
- ② 鈴木一馨、日本古代の都市・住宅と風水、明治大学古代学研究所シンポジウム「都城・住宅の風水思想—東アジアの陽宅風水研究—」、2008年6月15日、明治大学
- ③ 鈴木一馨、日本における江西派風水の受容について、第51回歴史地理学会大会、2008年5月18日、宮城大学
- ④ 鈴木一馨、日本における江西派風水の展開について、日本宗教学会第66回学術大会、2007年9月16日、立正大学
- ② 鈴木一馨、日本古代における風水の転換、明治大学古代学研究所シンポジウム「東アジアの風水思想」、2007年10月21日、明治大学